



除夜の鐘を大晦日の夕方につく理由

除夜の鐘を深夜でなくて、夕方五時の昏鐘（こんしやう）に続いて、つくようになったのは一昨年（令和五年）からで、三年目になります。もう、「除夜の鐘を大晦日の夕方につく理由」なんて書かなくても良いか、と思います。でもねー、いつも熱心に寺からの便りを読んでもくれる人ばかりではない。

透明封筒に入れられた寺報はそのまま「ミ箱へ直行、なんて人もおられるでしょうか。そんな方が「たまには、読んでみるか」と便りをひらいた時、「なんで、除夜の鐘を深夜につかないのだ。手抜き住職め」と邪推されるのもシヤクなので、今年も書きます。

結論を言ってしまうと、除夜の鐘を深夜につく歴史はそれほど古いことではなさそうです。長い年月にわたって続けられてきたことならば、守らなければいけないけれど、新しいことならば、変えても不都合はないだろう。たとえば、日本民俗学の創始者・柳田國男が当時の人は、「日の入りとともに一日が終わる。除夜の鐘をきいては昔からの日本人の年の取り方ではない」（『柳田國男全集第二十巻』筑摩書房）と指摘しています。

そして、ある歴史学者は「江戸時代において除夜の鐘が撞かれていたという事実自体が確認できない」と結論づけ、東京の浅草寺と

寛永寺が除夜の鐘を正式につき始めたのは昭和二年十二月三十一日からだと断定します。ならば、今のような除夜の鐘はいつ、どのように始まったのか。歴史学者は次のように記述します。

「仮に、村などでの地域的な慣習、もしくは民間信仰的な行事などのひとつとして行われていた除夜の鐘という行事が、近代以降に広く全国的に広まったと考えられるのであれば、その方が自然とも言える」。

あるいは、除夜詣という言葉が少し前まではあったようです。大晦日の明るいうちに一年のお礼参りを神社仏閣にする。その帰りに蕎麦屋によつて口にするのが、年越しそば。深夜に年をまたいでそばを食べ終わるなんて、そんな身体に悪いことを昔の人はしていたはずがない。ただでさえ、身体を冷やすそばを深夜になんか食べたらず痢しちゃうよ。

除夜詣のように、なくなった習慣あり。新たにこじつけられた悪習あり。除夜の鐘を大晦日の深夜につくのは、それほど長い歴史でないのならば、一昨年と去年も夕方五時から「金剛経」というお経を読みながら住職ひとり除夜の鐘をつきました。良い修行になりました。今年もそうさせていただきます。一般の方はつけません。

境内の北、旧中山道に面したところにある伝道掲示板の令和6年12月に掲載するものを紹介します。

伝道掲示板からblog版

伝道掲示板には1ヶ月にひとつの言葉を紹介しています。経典の引用であったり、詩や小説のなかの言葉であったりします。道ばたの1メートル四方の掲示板ではお伝えできない、ことばの周辺はblogに載せています。

十二月のことば

パールハーバー

枕に法話

成道会

朝田黒冬

十

十二月のことばは令和五年十二月九日、日経新聞歌壇の掲載された俳句です。選者の紙野紗季さんが次のように評しています。「成道会は十二月八日、お釈迦さまが悟りを開いたことを祝う法会だ。真珠湾攻撃と同日、あらためて人間の在り方を考える」。

戦争といえば、今年（令和七年）、十一月十二日の日経新聞第一面、「春秋」欄が俳優の仲代達矢さんの訃報を伝えていました。



玄峰老師は開戦の日、次のようにおっしゃったという。『田中清玄自伝』（文藝春秋）から引用します。

「軍は氣違いじゃ。氣違いが走るときは普通人も走る。日本の軍という氣違いが、刃物をもって振り回している。今、齒向かっていったら殺されるぞ。そのうちに氣違いは疲れて刀を投げ出す。それを奪い取ればいい。」

「トッププロになれるのは10万人に1人」。仲代達矢さんが俳優座養成所に入る際にかけられた言葉だという。人見知りで無口な19歳は、役者には向かぬと自分でも感じていた。だが負ければ食っていけない。貧しかった幼少の記憶もバネにひたすら稽古に打ち込んだ。

▼〈途中略〉東京が焼き尽くされた大戦末期12歳。空襲で近所の少女の手を引いて逃げ惑ううち、ふとその手が軽くなる。少女は腕だけになっていた。供養もできず、後々夢にみた。反戦の姿勢は際立っていた。「始めるスイッチはいくらでもある。なのに始

田中清玄氏に冠せられる言葉は「ロビイスト」「黒幕」「転向者」など。そんな人物と玄峰老師がどこでどのように出会ったのか。などなど興味はつきないのですが、ここで書く余裕がないので、あとで。私の一年を総括すれば、山本玄峰にたどりついて、その大きさに驚いて、どうにか、せまり方がわかった年の暮れです。ということは、たいしたことはせずに一年間が過ぎてしまったということかな。

めたらやめられない。絶対にやってはいけない」。戦争をそう指弾し続けた。〈後略〉

はじめたらやめられない戦を、終わらせるために陰で動いたといわれる禪僧がおられます。山本玄峰老師（1866〜1961）です。玄峰老師は数奇な青春時代をへて得度、荒廃していたいくつものお寺を再興し、妙心寺派管長をつとめ、静岡県三島の龍澤寺で多くの雲水（修行僧）を育てました。